

説 林

攝論古逸章疏とスタイン氏
蒐集燉煌新出三攝論古章疏
とに就いて(上)

矢 吹 慶 輝

- 一、攝大乘論の本釋諸本
- 二、攝大乘論本釋兩論章疏
- 三、諸目錄に表はるゝ攝論章疏
- 四、新集攝論章疏錄
- 五、燉煌新出攝論古章疏
- 一、攝大乘論疏
- 二、攝大乘論疏卷第五
- 三、攝論章卷第一

『攝大乘論』には印度撰述の釋論があるのと其等に

據つて成つた攝論宗が唐に入つて亡びたのが主因となつて其章疏は餘り流行せず従つて現存の章疏では近代ではあるが先づ長泉院普寂の『攝大乘論釋略疏』五卷を擧げ得るのみである。但し是は世親の釋論を疏釋したものである。普寂は其卷首に於て本論の旨趣を説明して

實乃攝大乘之玄軌趣_ニ菩提_ニ之王路也、苟學_ニ大乘_ニ者寧可_下外_乎此_ニ而異求_上レ焉哉

と言つてゐるが、攝論は種々の意義に於て研究を價するものである。先づ傳説ではあるが世親が大乘に歸向した動機は『華嚴十地品』と『阿毘達磨攝大乘品』とを誦するを聞いた爲めであつたとしてゐるし其攝論釋は創めて大乘に歸した時の作であつたらしい。

眞如の擬當か隨緣かに依つて大乘を終始兩門に分けると本論は兩者の中間に位するもので普寂は『從始向終之玄猷』といつてゐる。従つて阿梨耶識論或は如來藏説に於て攝論の立脚地は特に證明を要するものである。『地論』や『唯識』や『楞伽』『起信』などとの比較研究には缺くべからざるものである。唯識家は阿陀那を以て第八識名となし執持を義とするが攝論の舊譯は或は第八識名となし或は第七識名とする。新譯家は一概に舊翻を錯誤とするが普寂は「舊亦有道理、非必錯誤也」といつてゐる如く見方の相違である。唯識十大論師の中で慈恩家の説のみを正當とせず他師の説でも合理的なるを採るとすると或は反つて攝論の立脚地に接近するものがある。全體攝論宗が興つて約百年間は人、淨土の業を修するものがなかつたといはるゝ程影響を與へた。然るに此の古宗の教迹教藉兩つながら堙滅することは遺憾とせざるを得ない。併し攝論就中攝論宗の研究には

其資料を要し就中攝論家の主張を見るべき著述を要するのにそれが散佚して仕舞つた。乃ち攝論家の攝論疏があると極めて便宜である。本篇で取扱ふ燉煌出攝論疏が悉く皆攝論家の作か否かは今全寫本を有たないから斷言を憚るも其中或者は慥に攝論家の所説と推定せらるゝものである。攝論には舊譯と新譯とがあつて新譯は唯識家の所説と餘り違つてゐないが舊譯は少し趣が異つてゐる。本篇は燉煌出攝論古章疏の來歴を調査せんとするものであるが出来る丈攝論に關係の章疏類を収録することとする。

一、攝大乘論の本釋諸本

『攝大乘論』は略して攝論といひ又廣苞大乘論とも稱せられ大乘阿毘達磨攝大乘經中の攝大乘品を釋したものと謂はる。法相家では瑜伽十支論の一に數へて『百法』、『五蘊』、『顯揚』、『雜集』、『辨中邊』、『甘唯識』、『三十唯識』、『大乘莊嚴』、『分別瑜伽』の九論と同

列とする。併し攝大乘論を瑜伽十支中に數ふるに就ては議論がある(『同學鈔』第一卷の第三、「十支論取攝論除因明事」の項下參照)。それは攝大乘論は他の諸論と異りて瑜伽を釋したるものではないからである。更に論の舊譯の所説が必しも玄奘の唯識宗と一致せざるがためであつて攝大乘論は玄奘以前の唯識(唯識)家と密接に關係し實に攝論宗の根本聖典である。此論が『阿毘達磨經』の一品を釋したといはれてゐても經文を引いて之を牒釋したのではない。そこで藏經中には宗經論中に攝してゐる。

攝大乘論は無著の所造て其釋論は世親無性の製作であつて本論の支那に譯せられて現存のものが『縮刷藏經』印度大乘宗經論中(來九)に收められてゐる下の三部である。

- 一 『攝大乘論』二卷 阿僧伽作 後魏 佛陀扇多譯
- 二 『攝大乘論』三卷 無著菩薩造 陳 眞諦譯
- 三 『攝大乘論本』三卷 無著菩薩造 唐 玄奘譯

二を略稱して梁論、三を唐論ともいふことがある。又其釋論は印度大乘諸論釋中(往八、九)にある下の四部である。

- 四 『攝大乘論』五卷 世親菩薩造 陳 眞諦譯
- 五 『攝大乘論釋論』十卷 世親菩薩造 廣安多共行炬等譯
- 六 『攝大乘論釋』十卷 世親菩薩造 唐 玄奘譯
- 七 『攝大乘論釋』十卷 無性菩薩造 唐 玄奘譯

以上によりて攝論本論は無著造、其釋論には二部即ち世親釋と無性釋とがあつて本釋總じて七部五十三卷あり。惟白の『大藏經綱目指要錄』五下に此等七部を總括して「然皆論佛敎勝相分別識情章分同大意無別其間攝義引緣小差耳」といつてゐるが茲に大意無別といふのは見様によりては當らない。攝論家は眞諦譯の梁論より起りて玄奘の唯識家とは稍其立脚地を異にしてゐて玄奘譯の攝論は所説が梁攝論よりも唯識家に似てゐるからである。同一無著の著述が譯本によりて異なるといふ場合、何れが無著

の眞意であつたかは別問題として本論三譯本が大意無別とはいはれない點があるといふ事は注意を要する。

本論の中扇多譯は分品なく眞諦譯は十品となつてゐて眞諦門下慧愷の序が附いてゐる。又玄奘譯は十分に分たれ總標綱要分、所知依分、所知相分、入所知相分、彼入因果分、彼修差別分、増上戒學分、増上心學分、増上慧學分、果斷分、彼果智分と次第されてゐる。

二、攝大乘論本釋兩論章疏

『攝大乘論』及び其『釋論』に注解したものは現存正續兩藏中には一本も無いが即ち支那撰述の疏は一本も現存してゐないが古來之に注釋を書いた人が全く無かつたといふのではない。先づ諸目錄を調査するに義天の『新編諸宗教藏總錄』には世親及び無性の釋論疏六部、外に義章略章等三部合せて九部の書目

と著者とを列舉してゐる。義天は高麗國文宗の第四子祐世僧統義天で義天録は又「海東有本見行録」とも名けらるゝものであつて今より八百二十餘年前高麗に此丈の章疏が揃つて居たものと思はるゝ。(義天傳『統記』第十四)

此『義天録』より五年後れて堀河帝の寛治八年興福寺永超の撰集にかゝる『東域傳燈目錄』には章疏合計二十部を列ね其中十卷以上のものが七部、七卷以上のものが五部を擧げてゐる。法然上人の『淨土初學抄』に載する『諸宗經疏錄』には法相宗の下に窺基の『攝大乘論鈔』十卷と攝論宗の下に眞諦智愷共撰の『攝論疏』二十五卷と靜嵩撰の『攝論疏』六卷の二部を列ねてゐる。寛政二年に智積院謙順が古録を稽查して作つた『諸宗章疏錄』の法相宗の下には鈔一部、疏五部章一部、義決一部總べて八部を列してゐて、章の五卷を除くの外皆七卷以上のものである。

此他興福寺藏俊が院宣に依つて注進せる『注進法相宗章疏』には四部を列し武藏全久院寶嚴興隆の『佛典疏鈔』には九部を列してゐる。

抑も古來多くの書籍目録があつたが誤寫があつたり、稽查に缺くる所があつたりして證典とすべきものが鮮ない中で前出の『諸宗章疏録』は寛政二年に智積院謙順が智積院經庫の古寫『五宗録』、東大寺圓超等奉敕撰華嚴宗章疏等）、『祖師製作録』、六波羅密寺惠範作）に就て上中兩卷に五宗、下卷に眞言録を加たもので現存章疏目録中の白眉とすべきものである。尤も五宗録中の法相宗章疏は謙順が既に『諸宗章疏録』の凡例中にも述べてゐる通り『東域傳燈録』及び藏俊の『法相録』に依りしもので攝論の末

疏も亦此等の典據に依りしものなるが今之を中心として如何程の章疏があつたかを調査しやう。併し此目録には撰者はあつても其年代や關係材料が擧げて居ないから古い攝論疏は如何程あつたかを調査する

には僧傳其他で稽へて見なければならぬ。

更には等諸目録が擧げてゐない古逸章疏が可なりに澤山にあつたことも調査を要する。實は諸目録が常時現存の章疏のみを擧げたとするとそれに依つて何時頃は何部現存と知れるが中には本がなくとも傳説て書き列へたものが多いから是非共更に新に僧傳等で探らなければならぬ。

普寂は攝論疏に關して下の如く言ふてゐる。

此論（攝論本釋）傳譯以來製疏者蓋向數十家、謂眞諦疏、智愷疏、慧賢疏、曇遷疏、法護指歸、道基疏、僧辨章疏、慧體疏、靈潤義疏、智儼疏、窺基疏、神廓疏等載在史傳、而其書都無下流此邦者、世傳神廓疏在於南都庫藏、而未聞有親閱覽者、未嘗昔在而今已湮沒乎、嗟嗟其似乎舩碇類乎砢霜之書盛行于千世、而人亦十襲珍重、其璠璠者夜光者多逸而不傳者何耶、敎家所可憾者多矣愚衷爲此惘然（略疏卷一）

此に概算數十家として中、十二人擧げてゐるのは比較的正確の紀傳である。以下總ての諸記傳を稽查する。

三、諸目錄に表はるゝ攝論章疏

一、眞諦智愷共撰、『攝論疏』八卷

此疏に就ては以上に列した諸目錄の中、唯『淨土初學鈔』中に保存せられて『諸宗經疏』が之を擧げてゐのみだ。併し是が攝論疏として第一に數ふべきものであることは下記によりて知らるゝことと思ふ。初め眞諦三藏が梁朝の迎請によりて摩伽陀國より南海に着き梁太清二年西紀五四八に建康に入りてより騒亂の爲め諸方を漂浪し乍ら諸經論を譯し將に故國に戻らんとして偶々廣州刺史歐陽頎、衡州刺史歐陽紇、征南長史袁敬德等の外護と智愷（慧愷ともいふ）慧智、僧宗等の懇請とによりて陳天嘉四年（西紀五六三）に廣州制旨寺で『攝大乘論』及其『釋論』を譯した

ものである。眞諦は梁末陳初に譯出經論記傳凡六十四部二百七十八卷と傳へられてゐるが攝論譯出後數年にして陳大建元年（西紀五六九）に寂した。乃ち攝論は晩年の譯出であるが道宣が『續高僧傳』に

自諦來東夏雖廣出衆經偏宗攝論、故討尋教旨（者）通覽所譯、則彼此相發綺續輔顯、故隨處翻傳親注（注或作流）疏解、依心（心或作止）勝相後疏并是僧宗所陳、躬對本師重爲釋旨、增減或異大義無虧

といつてゐる如く攝論と眞諦三藏とは離るべからざる關係で眞諦は實に支那攝論宗の開祖である。蓋、攝論は前にしては約三十年前、北魏の普泰元年（西紀五三一）に既に佛陀扇多が譯して居るし（歷代三寶記九）唐になつて玄奘が譯したが翻譯の外、弘通に努力したのは眞諦であつた。而して眞諦は他の外來翻譯三藏と異りて、盛んに經論の註釋を書いた。して見ると攝論本釋二論に關する註釋もあつたものと

推定が出来る。此の僧傳の文が判明でないが攝論の疏文があつて依止勝相の後は僧宗が三藏に尋ねて書いたもの、様にも思はるゝ。

眞諦の高弟中著明なるは智愷、僧宗、智休、法准、僧忍、法泰、慧曠等で就中最も助力したものは慧愷である。慧愷の攝論序（縮刷藏經にては本論にも釋論にも同序が附せられてゐる）を見ると明かである。『俱舍釋論』序も參照すべきである。慧愷の『攝論』序には

法師眞諦既妙解聲論善識方言、……席間函丈終朝
靡息、愷（慧愷）謹筆受、隨出隨書一章一句備盡研纂
釋義若竟方乃著文……卽以其年樹檀之月文義俱竟
本論三卷、釋論十二卷、義疏八卷合二十三卷（來
九の四六）

といふてゐるから當時攝論疏があつたとは争はれぬとである。『諸宗疏經錄』が眞諦慧愷共撰とせるは或は之に基いたものかも知れない。普寂が眞諦疏と智

愷疏と二部に見たのも此邊の傳に依つたものであらふ。此に八卷といふてゐるのに『諸宗疏經錄』には二十五卷といふてゐるが或は本論釋論義疏合して二十三卷を誤つて二十五卷としたかも知れない。『高僧傳』を見ると眞諦門下に攝論の講説が特に盛んであつて義記などがあつたと推定さる事實がある。全體印度大乘兩系の一たる世親系統の支那傳來は先づ勒那摩提と菩提流支と佛陀扇多との三人の翻譯經論が第一回で眞諦は其第二回といつて可い。尤も『起信論』の眞如緣起説は世親系統でないと舊くから見てゐるものもあるが起信論が僞疑に屬すべしとの議論は兎に角として其説は眞如緣起といつても阿梨耶緣起といつても可いので眞諦と玄奘とが同じく世親系を傳へて其間に多少の相違があるとすると起信論も阿梨耶説の一異説と見て可いのである。眞諦の高足法泰が新翻の『攝大乘論』や『俱舍論』を齎らして建業に到るや陳の武帝は三論を尊べる爲に泰は道俗の受

くる所とならなかつたこと又次に記す様に會楊鞏碩望の反對があつたりしたとから見て慧愷が攝論序に『唯識微言因茲得顯三性妙趣由此而彰』といつた真諦の教説は從來の三論や成實の空論に反對せる有論であつて法泰傳に言つてゐる通り(致二の八九右)一。新宗であつた。乃で此新宗を聽かんとして集つた學徒は少くなかつた。法泰傳には真諦に從つて『筆受文義垂二十年、前後所出五十餘部并述義記皆比士所無者』といふてゐる。智愷(附見致二の八九左)は真諦と共に「對翻攝論躬受其文七月之中文疏并了都合二十卷後更對翻俱舍十月便了文疏合數八十三卷諦云……今譯兩論詞理圓備吾無恨矣」といはれ、愷は真諦よりも一年早く光大二年に五十有一歳で俱舍業品第九卷まで講じて寂したので真諦が續講して次年に惑品第三卷で真諦も亦寂したと傳へられてゐるし、智愷の終焉の詩に「遺文空滿笥」といふ一句があるし、愷に攝論疏のあつたことは疑ふべからざるもの

攝論古逸章疏とステイン氏真集燉煌新出三攝論古章疏とに就いて

である。『諸宗經疏』の二十五卷といつてゐるのは智愷傳に依つた様である。それから曹毗(附見致二の八九右)は真諦の弟子で智愷の叔子であつた。攝論を學び太建三(或は二)年に建興寺の明勇法師に請ふて攝論を續講せしめ成學名僧五十餘人が集つたと記されてゐるから此處にも疏記類があつたと見ても差支はない。更に循州平等寺沙門智敷(敷或作敷)(附見致二の八九左)は智愷の俱舍文疏を掇拾し又其殘後、攝論俱舍論を弘め仁壽元年に至る迄に「偏講攝論十有餘遍坐中達解二十五人」と傳へられ、是より先き開皇十二年王仲宣が叛逆の折、敷の寺房が燒かれて「文疏并盡」の中には攝論疏などがあつかも知れない。道尼も亦智敷と共に真諦の新宗に歸し「輿講攝論騰譽京師」と傳へられてゐる。此等講説の盛行中、攝論疏が一二部位あつたと見るのは至當である。道宣は「自是南中無復講主、雖云敷說蓋無取矣」といつてゐるが後代の攝論疏よりも隋以前の攝論疏は此

意味で益々珍重すべきものである。

全體眞諦三藏は梁陳騷亂の時に支那に來て僅かに二十二年間の滯在中、諸處に流離して備に辛苦を嘗めた。僧傳には七十に垂んとして冬夜攝論を譯せる折の艱苦の狀を記してゐるが特に晩年廣州にありて翻譯の際、僧宗等再び建康に迎請せんとせしが會楊聲碩望奏して「表嶺譯する所の衆部は多くは無塵唯識を明し言治術に乖きて蔽國の風あり諸華に隸せずして荒服に流すべし」(唐僧傳一)といつたので遂に三藏が南海所譯の經論は陳の代に顯はれざりしと傳へらる。『淨土初學鈔』には攝論宗に南地北地の兩家ありて南地派は眞諦、法泰、靜嵩、僧宗、僧忍、法准と次第し北地派は曇遷、慧休、慧遠、淨業と次第し地論の淨影(慧遠)は曇遷より攝論を禀くといつてゐるが陳世に斯る非運に會て更に玄奘の唯識宗起るや攝論宗は全く新宗に併合さるゝ様になり従つて其義疏の如きも傳はざるに至つたものと思はる。

二 靜嵩撰 『攝論疏』六卷

本疏を記せるは上述諸佛典錄中、『諸宗經疏』のみである。靜嵩とは『唐僧傳』法泰の附傳に見ゆる彭城の學僧で僧傳中には「事出嵩傳」としてあるが靜嵩の別傳は唐僧傳に見當らない。然るに靜嵩は靖嵩に違ひない。靖嵩傳は唐僧傳第十卷にあつて眞諦三藏が梁陳の間、二十餘年通傳地なく「雖言譯布講授無聞、唯嵩獨拔玄心翫味茲典、纔有講隙便詣沙門法泰諮決疑議、數年之中精融、二部(攝論俱舍論)といひ「嵩學資眞諦義寔天親」といひ「撰攝論疏六卷、雜心疏五卷又撰九識三藏三聚戒二生死等玄義并流于世爲時所宗」とあり、又「關中義學因從過干徐邦、詣嵩法肆、伏膺受業、由此門徒推盛、章疏大行」とあり、三の道基も曾て嵩の門下であつた。又眞諦の高足法泰傳によると靜嵩は法泰に就て「晝談恒譯夜請新宗」といひ又「泰(清泰)博諮眞諦傳業嵩公」といふから嵩泰二傳から見て其攝論疏の來歴を知るべきである。

三 道基述 『攝論義章』十卷

『義天錄』に據る。『東域傳燈目錄』には「論章四卷」となし。『諸宗章疏錄』には論章五卷となして撰名を逸せるもの是に當るが如く又同錄増補には三卷となし諸錄卷數に於て相違あるも撰者の來歴に就ては傳文が明かである。道基には眞諦譯の『世觀釋論』の序があつて『縮刷藏經』往八(二の左)に在る。中に「至如此論衆名坦蕩似王路之無枝、藏識常流譬洪川之長注、三性殊旨混爲一心、六度虛宗俱栖彼岸云々」などといつてゐる。其傳は『續高僧傳』第十四に出て居て貞觀十一年に六十有餘歳で歿したのであるから唐益州福成寺道基となつてゐても隋唐に跨つて活動した人である。隋大業以來、『雜心玄章并抄』八卷、『大乘章抄』八卷等の著述があり其講筵には隋后が論場に親臨するといふ様な盛況であつた。傳には『攝論疏』のことが書いてないが、致閑大乘弘揚攝論」といふてゐるから其講録があつてそれが支那朝鮮に流傳した

ものであらふ。此疏は玄奘譯以前であるから眞諦譯攝論の疏であつたものと思ふ。

四 法常述 『世親釋論疏』十六卷

此疏を記せるは『義天錄』のみである。尤も『佛典疏鈔』にも記載せられてゐるが、『佛典疏鈔』の攝論の下は全く『義天錄』を寫したものに過ぎない。茲に法常と言ふのは『續僧傳』第十五にある唐貞觀十九年六月二十六日に七十九歳で寂した法常を指したものであらふ。法常が二十二歳(隋開皇八年に當る)の記事中に「攝論初興隨聞新法仰其弘義、于時論門初關師學多途、封守舊章鮮能廻覺、常(法常)乃博聽衆鋒校其銛銳……隨講出疏示顯群迷」といひ傳文に「初常(法常)涉詣義門妙崇行解故衆所推、美歸於攝論而志之所尙(尙或作宗)慕涅槃」といひ實に「著攝論義疏八卷、玄章五卷」といへば義天錄が十六卷とし注に「或八卷」とせるもの僧傳に合すといふべきである。法常傳には新羅王子の位を棄て、出家せる金慈藏が

入唐して法常に菩薩戒を授かつたといふてゐるし『唐僧傳』二四、慈藏傳には「一夏講大乘論」といふてゐるから法常の『義疏』八卷が朝鮮に傳來して義天の『海東有本見行錄』中に記載せらるゝに至りし緣由も略推察が出来る。義天錄には撰者に關して「或云道證述待勘」といふてゐるが法常述「玄章五卷」を「畧章四卷」としてゐる。

五 法常述 『略章』五卷或は『玄章』五卷

前項を看よ

六 景法師述 『攝論疏』□卷

『東域傳燈錄』と『增補諸宗章疏』とに其名が載つてゐる。卷數は何れも不明としてある。『東域傳燈錄』には天親古論と注せられてゐるが玄奘新譯に對する眞諦譯を意味せしものであらう。景法師とは如何なる人か不明であるが續高僧傳第十四道基傳の附見に出て居る「復有慧景實遷者并明攝論譽騰京國」致三の三三左であつたらしい。それから『諸宗章疏錄增

補』には論疏の外に

七 景法師述 『攝論章』三卷 を擧げてゐる。

八 辨相撰 『古論疏』七卷

『東域傳燈錄』に此書目がある。辨相は『續高僧傳』第十二に見ゆる辨相のことであらう。傳によれば辨相は少林慧遠の弟子で隋開皇仁壽の頃に世に知られ唐貞觀初年七十餘歳て疾の爲に自縊して歿した人であつて大小三藏に通じたが「特に涅槃一部詳覈有聞末南投徐部、更探攝論及以毗曇、皆披精詣傳名東壤」といはれてゐる。是の攝論疏は古論疏と後世から名けられた通り玄奘譯に據つたものではない。『續高僧傳』第十五靈潤傳中、辨相の事を記して「學兼大小聲聞于天、攝論初興盛其麟角、在淨影寺創演宗門、造疏五卷、即登敷述京華、聽衆五百餘僧堅義之者數登二百云々」とあり卷數は茲に五卷とされてゐる。

九 神泰述 『攝論疏』十卷

『東域傳燈錄』にも『諸宗章疏』にも『注進法相宗

章疏録』にも出てゐる。是も玄奘門下の神泰であつ

たらふ。即ち玄奘の譯場に於て證義大德十一人中の

蒲州普救寺沙門神泰（開元錄八結四の七二）ならん。

十 玄應述 『攝論疏』十卷

『東域傳燈錄』に記されてゐる。玄應といふ人は支那

僧傳中に少くとも二人あるが此疏は恐らく『玄應音

義』の著者の述であらふ。玄應は續高僧傳隋智果の附

傳に字學の富を以て鳴りし由しを記し『內典錄』五

（結二の八五）『開元錄』八（結四の七五）中に『音義』二

十五卷の著を牒してゐる。然るに玄應は字學大德と

して玄奘の譯にも參加したのであるが、道宣の內典

錄には「恨叙綴纒了未及覆疎」といつてるから此攝論

疏は貞觀廿三年の玄奘譯によりしものか否かは決し

難し。

十一 毗跋羅撰 『攝論疏』七卷

『東域傳燈錄』と『諸宗章疏』とに載つてゐる。後

者の注に「未詳傳記」といふてゐて撰者に就て不明

なるは遺憾である。

十二 元曉述 『世親釋記』四卷

『義天錄』、『東域傳燈錄』、『諸宗章疏錄』、『佛典疏鈔

錄』等皆之を記し『義天錄』に「世親釋記」といひ

『東域』に「論疏」といひ『佛典疏鈔』に「論略記」といふ

て書題に相違あるも卷數四卷は諸錄の一致する所て

ある。元曉の傳は『宋高僧傳』四にあるが『金剛三

昧經』の驗記並に同疏を記する詳細なるも攝論疏を

記してゐない（致四の八六）。併し元曉は海東師とも

呼ばれ數多の經疏ありて是等を海東疏といつてる位

朝鮮に於ける有名なる疏主であつて特に華嚴に詳し

かつた。近刊李能和氏『朝鮮佛教通史』上、元曉傳に

は諸傳を引用せるも餘り著述を擧げて居ないから從

つて『攝論疏』も擧げてゐない。併し同書中卷（六

四）に海東に於ける攝論宗の傳來を記して新羅圓光

法師が開皇九年隋に入りて此宗を傳來すと記して元

曉亦『世親釋論略記』四卷の著ありしを擧げてゐる。

高麗の義天が既に四卷釋記を擧げてゐるし元曉は海

東の疏師なるが故に其著ありしは疑ふを要せぬことである。元曉は朝鮮の傳によれば新羅眞平王の三十九年隋大業十三年に生れ曾て義湘と共に入唐し後ち故國に還つた人である。

十三、太賢述 『世親釋論古述記』一卷

『義天錄』、『佛典疏鈔』に之を記してゐるのみであるが佛典疏鈔は義天錄記載を寫し取つたものであるから義天錄を依據とするより外ない。併し太賢は靑丘と號し新羅に於ける有名なる製疏家であつて其著は中華の學者にも重んぜられた程で其筆に成つた現存遺著も少くないから攝論疏があつても不思議がない。併し太賢に關する乏しき傳記材料中には明記を缺いてる様である。にも拘らず高麗の義天が西紀一〇九〇年(義天序)に唐天寶十二年即ち西紀七五三年に新羅王の詔により内庭に入りて雨を祈つたことのある(三國遺事)太賢の遺著を記録したものであるし太賢は新羅に於ける瑜伽祖師即ち法相宗の祖師で

あつて唯識に關する著述もあり攝論に關する疏記があつたとして聊かも差支ない。但し此『世親釋論古述記』は玄奘譯の釋論記であつたと想像さるゝ。

十四 太賢述 『無性釋論古述記』一卷

是も『義天錄』の記述に見ゆるもので前の『世親釋論古述記』の外に『無性釋論』の記を書いたものと想像さるゝ。無性釋論は玄奘譯であるから太賢の兩古述記は玄奘譯を取つたものである。尙前項、世親釋論古述記を參照すべきである。

十五 智儼述 『無性釋論疏』四卷

『義天錄』に據る。智儼は貞觀十四年に八十四歳にて寂せる法順の弟子で其傳は『續高僧傳』第廿五法順の附傳にある。文に「華嚴攝論尋常講說」といふてるから華嚴と攝論とに秀てた人であつたことが推定さるゝ。玄奘は貞觀十九年に長安に戻つて貞觀二十三年に『無性釋論』を譯したのであるから智儼の傳論講説は法順の歿する前からやつたかも知れない

が此に出した攝論疏は玄奘譯に依つたものなることは明かである。

十六 神廓述 『無性釋論疏』十四卷

『義天錄』、『東域傳燈錄』、『諸宗章疏』、『注進法相宗章疏目錄』、『華嚴宗章疏錄』等に記載せられ卷數は皆十四卷或は十一卷と傳へてゐて是疏は支那にも朝鮮にも日本にも行はれたものである。神廓は如何なる來歴の人か不明であるが『東域傳燈錄』には釋無性論として鸞宿の校記に「私云玄奘門人」といつて然るに此他に

十七 神廓撰 『攝論章』三卷

の著録があつたことを傳へてゐるのが『東域傳燈目錄』と『諸宗經疏』と『増補諸宗章疏』とである。即ち神廓には『無性釋論疏』十四卷と『攝論章』三卷との二部の攝論に關する末疏を書いたことになる。『東域傳燈錄』に論疏を十一卷とし論章を十一卷にしてゐる所を見ると『義天錄』が疏十四卷のみを擧げて論

章を數へてゐないのは疏章合併で擧げてゐるものと思ふ。

『同學鈔』中(大日本佛教全書一、七五)、畢竟無性に關して樞要の文を引けるに此文の出據に關して「有人云」として次の文がある。

要文引_二神廓文_一也攝論疏二可見之同今要也

神廓の『攝論疏』二に樞要の文と同文があるといふ。又一意識計の下に於て(同上二三四)

加之神廓師攝論翻譯筆受源成_二六識義_一豈不_二依用_一耶……神廓道證等人師不知_二深意_一任_二顯文相_一作_二解釋_一誰可_二指南_一耶

といつてゐるし又眞諦譯は梁陳何れの代かを定むるに就き

神廓云眞諦譯云思惟今攝論云作意、梁代呼作意爲思惟云々。

の文を引いて梁代出の傳を傍證してゐる(同上二の十一一)から當時南都に在つたものである。普寂は

南都にあるとの傳はあつても親しく見た人がないと記してゐることは前に引ける如くである。

十八 窺基述 『攝大乘論抄』十卷

『東域傳燈目錄』、『諸宗經疏錄』、『諸宗章疏錄』、『注進法相宗章疏錄』等に列擧せられ玄奘門下の高足にて「百本疏主」と稱せられし(宋高僧傳四)大慈恩寺窺基の撰である。是は勿論玄奘譯の攝論に據つて之を略抄せるものである。

十九 玄範撰 『攝論疏』七卷 或云十卷

『東域傳燈錄』に據る『諸宗章疏錄』にも十卷論疏の名を列してゐる。鸞宿の校記に「私云玄奘門人」とある通り玄奘門下の玄範であつたらふ。

以上は撰者の名あるもので上記諸錄に載つてゐるものゝみを集めて關係材料を稽査し兼て古攝論章疏か新攝論章疏かを見たのであるが此他に作者未詳のものがある。今獲るに従つて之を追記すると。

廿 攝論疏 十五卷 『東域傳燈錄』、『諸宗章疏』に見

え『東域錄』に古論といふてゐるから梁攝論疏であつたものと思はる。

廿一 『攝論疏』二十卷 『東域傳燈錄』に出づ。

廿二 『攝論義決』七卷 『東域』、『諸宗章疏』同増補の

諸錄に出づ。

廿三 『攝論十種散動疏』一卷 『東域錄』、『諸宗章疏』

増補に出づ。

廿四 『攝論疏』八卷 『東域』に出て注に『天親論疏

不注作者見行』と記されてゐる。

廿五 『攝論章』五卷或は三卷 『東域錄』に「上中下見行」と注せらる。

廿六 『攝論章』三卷 『東域錄』に出づ。

廿七 『名教』一卷 『義天錄』に出づ。

廿八 『攝論料簡』一卷 『東域錄』に出づ。

以上の中撰者の名を有するもの凡て十八部、亡名

九部合して廿七部であるが十九より廿七までの九部中には日本製作のものなどが雜つてゐるかも知れないし又重複もあるらしいが兎に角撰號があつて略年代の判明せるものが都合十七部ある（毗跋羅撰を除く）。其中神泰、玄應の撰述は古論に據つたか新論に據つたか不明であるがそれ以前の七部は古論に據つたものと見なければならぬ。其以後は勿論玄奘譯に據つたものである。併し佛教教理史上重要な意義

赤土考補遺

桑田 六郎

余は先きに東洋學報第九卷第三號に赤土考一篇を掲載し、隋の赤土國は普通に考へらるゝ如く今の暹羅にあらずして、唐の室利佛逝なるべきかと云ひし

を有つてゐた攝論宗例へば『淨土初學鈔』中攝論宗の下に記せられてゐる様に「攝論梁代傳來此土、爾後百年之間世多不修淨土之業」といつた程の影響があり特に眞如緣起賴耶緣起に關する大切な資料であつた攝論宗は梁論に據つたもので梁論の章疏が今日に残つてゐるとするとそれは佛教史上の珍とすべきである。

が其後浙江圖書館叢書第一集を見る機會を得て、そこに丁謙氏の隋書四夷傳攷證の中に氏の赤土論を發見せり。又高桑駒吉氏は余の赤土考に對して反對説を東洋哲學第廿六編第十號に「赤土國に就きて」と題して掲げられたり。されば余は再び赤土を論じ兩氏の説を批判せんと欲す。